



Title	高校生時と大学生時における主張性の4要件と友人関係満足感との関連
Author(s)	渡部, 麻美; 松井, 豊
Citation	対人社会心理学研究. 2011, 11, p. 35-42
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11282
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

高校生時と大学生時における

主張性の4要件と友人関係満足感との関連^{1) 2)}

渡部麻美(日本学術振興会特別研究員 PD・東京学芸大学)

松井 豊(筑波大学大学院人間総合科学研究科)

本研究では、高校生時と大学生時で主張性の4要件(渡部, 2006)と友人関係における適応との関連の様相に、違いがみられるかを検討した。その際、4要件と友人関係満足感に曲線的な関係があることを想定した分析を用いた。また、高校生時の主張性と大学生時の主張性との関連についても明らかにした。大学生257名を対象に、高校生時と現時点(大学生時)での主張性と友人関係満足感の程度について尋ねる質問紙調査を実施した。数量化 Ⅱ類の結果、高校生時には「情動制御」や「主体性」が、大学生時には「情動制御」や「素直な表現」が友人関係満足感を高めていた。主張性が高まるとともに漸進的に満足感が上昇するのではなく、一部の要件が極度に高い場合に急激に満足感が増大することが示された。パス解析を行ったところ、大学生時には高校生時に不十分であったと感じている点を補完するような自己表現が行われていることが示唆された。

キーワード: 主張性、友人関係満足感、青年期、大学生、曲線的関係

問題

本研究では、高校生時と大学生時で主張性と友人関係における適応との関連の様相に違いがみられるかを明らかにする。それに加えて、高校生時の主張性と大学生時の主張性との関連について検討する。

高校生・大学生の友人関係の変化と主張性

主張性(assertiveness)は、自他双方を尊重する自己表現のスキルである。思春期・青年期には、友人関係を良好に維持する上で、主張性が特に重要な役割を果たすと考えられている(柴橋, 1998)。

青年期を対象とした友人に対する行動についての先行研究では、特に高校生から大学生にかけての時期に友人との関わり方が変化することが示されている。榎本(1999, 2000)は、中学生、高校生、大学生までの友人関係について、感情的側面と活動的側面、欲求の側面の発達的变化を検討した。欲求の側面については、高校生と大学生においてお互いの相違点や価値観を尊重しあうことを求める「相互尊重欲求」が高くなっていた。また、高校生男子の活動的側面では、友人とともに遊ぶ「共有活動」とともに、互いの相違点を認め価値観や将来の生き方などを語り合う「相互理解活動」が多くみられた。一方、高校生女子の活動的側面では、他者を入れない絆で関係をつくる「閉鎖的活動」が多くみられたが、「閉鎖的活動」は「相互尊重欲求」と関連することが見出された。山岸(1998)は、小学生、中学生、大学生を対象に質問紙調査を実施し、対人交渉方略の発達的变化について検討した。その結果、自他双方の欲求を考えて対人的葛藤を解決する方略を使用する傾向が、中学3年から大学生の

間に上昇することが明らかになった。

榎本(1999, 2000)や山岸(1998)による知見から、高校生の時期は、自分と友人の相違点や価値観を尊重し合う欲求が高まり、実際の活動も相互尊重的なものへと変容しつつある段階であると捉えられる。高校生の時期に、友人関係において自他の考えや感情を考慮し、相互に尊重し合う行動が、徐々に生じてくると考えられる。

このような時期において、自他双方を尊重する主張性は、友人との関わり方や友人関係における適応と関連すると予想される。近年、国内の研究においては、主張性に含まれる相互尊重の理念が重視され、主張性を「自己表明」と「他者の表明を望む気持ち」の2側面(柴橋, 2001)から捉えた研究が複数実施されている(阿部, 2007; 稲田, 2006; 工藤・金子・池上・佐々木, 2007)。阿部(2007)は、主張性を「自己表明」と「他者の表明を望む気持ち」の2側面から捉える柴橋(2001)の尺度を用いて、主張性と自尊心および不安との関連を検討した。その結果、「自己表明」と「他者の表明を望む気持ち」とがいずれも高いHH群で、自尊心が高く不安が低いことが明らかになった。さらに、友人との葛藤場面における行動について検討したところ、HH群は深刻な状況下で一方向的に自分の欲求を押し通すのではなく、相手に対しても妥協案や解決案を示し、お互いが満足する結果を得られるように話し合おうとする行動をとることが確認された。稲田(2006)は、主張性と友人への欲求(榎本, 2000)などの変数との関連を検討した。その結果、友人関係において互いを尊重することを求める「相互尊重欲求」が、「自己表明」と「他者の表明を望む気持ち」とを含めた主張性のす

すべての下位尺度と正の相関を示すことが明らかになった。工藤他(2007)は、主張性と友人とのつきあい方との関連について検討した。その結果、友人と深いつきあい方をしている人は、「自己表明」と「他者の表明を望む気持ち」とがいずれも高いことが明らかになった。

これらの先行研究の結果から、「自己表明」と「他者の表明を望む気持ち」の両方が高い人は、友人と互いに尊重し合った深いつきあい方をしており、適応状態も良好であると考えられる。

阿部(2007)、稲田(2006)、工藤他(2007)の研究は、大学生を対象に現時点での主張性と友人関係について尋ねている。大学生の時期においては、友人関係はすでに相互尊重的な行動や欲求をとまなう関係になっていると考えられる。先に述べたとおり、友人関係は、高校生の時期に相互尊重的なものへと変容すると想定される。友人関係が相互尊重的なものへと変容する時期である高校生と、相互尊重的な友人関係がある程度確立した大学生とでは、主張性が友人関係における適応状態に与える影響の様相も異なると推測される。さらに、高校生時に主張性をどの程度獲得しているかによって、友人関係における適応が変化し、大学生時の主張性の程度や適応状態に影響を及ぼすことが予想される。

対人関係における主張性の効果

これまでの主張性研究では、主張性が高いことは概して対人関係における適応を良好にし、積極的な対人行動を促すと考えられてきた(Lorr & More, 1980; 玉瀬・越智・才能・石川, 2001)。Lorr & More(1980)は、主張性と自尊感情などとの関連を検討した。その結果、主張性の下位尺度である「指導性」、「対人的主張性」、「権利と利益の擁護」と自尊感情との間に正の相関が確認された。玉瀬他(2001)は、主張性と攻撃性、シャイネスなどとの関連を検討した。その結果、主張性と攻撃性との間に有意な正の相関がみられたものの、主張性とシャイネスとの間には負の相関がみられた。以上のように多くの研究で、主張性は適応と正の関係をもつことが示されている。

しかし、主張的な行動をとる人に対する評価を検討した研究は、主張的であることが他者から好ましくないと評価されることを明らかにしている(Kern, 1982; Lowe & Storm, 1986)。Kern(1982)は、参加者にビデオで会話場面を見せ、登場人物の印象を評定させる実験を実施した。その結果、主張的な行動をとった人物は、好ましさや思いやりに関して低く評価されることを見出した。また、共感的な発言をとまなう主張的な行動をとった人物が、主張的な行動のみの人物より好ましさに関して高く評価されることも示されている(Kern, 1982)。Lowe & Storm(1986)のビデオを用いた実験においても、ビデオ

の中で主張的な行動をとった人物は、受動的な行動をとった人物よりも好ましさに関して低く評価された。

以上から、主張性の高い人は、本人の主観的な適応状態はよいものの、他者からは否定的な評価を受けることが明らかになっている。

近年では低すぎる主張性や高すぎる主張性が、対人場面において曲線的な効果をもたらすことが示されている。主張性とリーダーシップとの関連について検討したAmes & Flynn(2007)は、主張性が高い場合には道具的 outcome が高くなるが、社会的 outcome は低くなり、結果として全体的な outcome が低下してしまうと述べている。この予測をもとに、職場内における同僚からのリーダーや管理職の評価について調査を実施した結果、主張性が中程度に高い場合に最もよいリーダーであると評価されることが明らかになった(Ames & Flynn, 2007; Ames, 2009)。

主張性を多側面から捉えた研究でも、主張性が適応との間に曲線関係を有することが示されている。渡部(2006)は、主張性を「素直な表現」、「情動制御」、「他者配慮」、「主体性」の4要件³⁾の視点から検討することを提案した。4要件の視点を取り入れることで、主張性と適応や他者からの評価との関連について、より詳細に検討できると考えられる(渡部, 2006)。渡部(2009)は、主張性を4要件の視点から捉えた場合、必ずしも主張性と適応に直線的な正の関係がないことを示している。具体的には、高校生を対象に、精神的適応と主張性の4要件との関連について検討したところ、すべての要件について高ければ高いほど適応的であるとはいえず、「他者配慮」に関しては、極端に高いことによって精神的不適応に陥ることが明らかになった(渡部, 2009)。

以上のように、近年の研究知見からは、対人関係において、主張性が高ければ高いほど適応的であるとはいえない。他者評価によるAmes & Flynn(2007)からは、主張性が過度に高くなることで他者からの評価が下がり、周囲に受け入れられなくなる可能性があること、自己評価による渡部(2009)からは、主張性のうち「他者配慮」が過度になることで精神的適応状態が悪化することが示された。研究によって様相は異なるが、主張性と適応との間には曲線的な関係が存在すると考えられる。したがって、高校生や大学生の友人関係における適応に関しても、主張性が高いほど適応状態が良好になるという直線的な関係ではなく曲線関係が示される可能性がある。

目的

本研究では、主張性の4要件と友人関係における適応との関連の様相が、高校生時と大学生時で違いがみられるかを明らかにする。その際、主張性と適応状態との

Table 1 大学生時における4要件尺度の因子分析結果(主成分分解・バリマックス回転・4因子指定)

場面名	項目	1	2	3	4
F1 他者配慮 ($\alpha = .85$)					
権利の防衛	返して欲しいと言った場合, その場の状況がどうなるかを考える	.79	.11	.10	.07
権利の防衛	返して欲しいと言った場合, 友達との関係がどうなるかを考える	.78	.11	.03	.03
要求の拒絶	断った場合, その場の状況がどうなるかを考える	.75	.22	.02	.08
意見の表明	自分の意見を言った場合, その場の状況がどうなるかを考える	.74	-.01	-.06	.21
意見の表明	自分の意見を言った場合, 友達との関係がどうなるかを考える	.73	.15	-.07	.10
要求の拒絶	友達の今の機嫌を推測する	.61	.21	-.06	-.06
F2 情動制御 ($\alpha = .79$)					
意見の表明	友達と意見が異なっても, いつもどおりに平静でいられる	-.05	-.73	.25	.16
要求の拒絶	無理なことを頼まれても, いつもどおりに落ち着いて対処できる	-.03	-.68	.22	.27
意見の表明	友達と意見が異なると, 不安な気持ちになる	.25	.66	.14	.01
要求の拒絶	頼まれたことを断るのは緊張する	.39	.60	-.15	.05
意見の表明	自分の意見を素直に言うことは気後れする	.32	.57	-.30	.10
権利の防衛	貸したものを返して欲しいというのは緊張する	.50	.53	-.07	.04
F3 素直な表現 ($\alpha = .73$)					
意見の表明	自分の意見を素直に言う	.04	-.22	.66	.29
要求の拒絶	「他の誰かに頼んだ方がいい」と提案する	.05	.30	.65	-.11
権利の防衛	「返して欲しい」と素直に言う	-.12	-.34	.64	.11
意見の表明	なぜ友達がそのような意見を持ったのかをたずねる	.05	.05	.64	.33
権利の防衛	「返してもらえなくて困っている」と自分の気持ちを言う	.04	-.23	.59	.10
要求の拒絶	「今はできない」と素直に言う	-.13	-.19	.58	.01
F4 主体性 ($\alpha = .84$)					
意見の表明	友達に対してどう対応したらよいか, 自分で判断する	.09	-.06	.09	.88
権利の防衛	友達に対してどう対応したらよいか, 自分で判断する	.07	-.07	.13	.85
要求の拒絶	友達に対してどう対応したらよいか, 自分で判断する	.17	-.06	.19	.77
負荷量の平方和		3.90	2.91	2.70	2.50
因子寄与率		18.59	13.83	12.86	11.92

間に曲線的な関係があることを想定した分析を実施する。また、高校生時の4要件の程度が大学生時の4要件の程度に与える影響を明らかにするために、高校生時の4要件と大学生時の4要件との関連について検討する。

方法

調査対象者 茨城県の国立大学と岡山県の私立大学に在籍する大学生・大学院生 257名(男性 103名, 女性 154名, 平均年齢 19.4歳)。

調査時期 2007年6月 7月。

調査手続き 個別記入形式の質問紙調査を実施した。

調査内容 (1)主張性の4要件尺度: 渡部・松井(2006)の主張性の4要件尺度を21項目に短縮して使用した。選択肢は、「1: あてはまらない」、「2: あまりあてはまらない」、「3: どちらともいえない」、「4: ややあてはまる」、「5: あてはまる」の5件法であった。(2)友人関係における適応の指標: 友人関係満足感尺度(加藤, 2001)の6項

目を使用した。選択肢は、「1: あてはまらない」、「2: あまりあてはまらない」、「3: どちらともいえない」、「4: ややあてはまる」、「5: あてはまる」の5件法であった。(1)の尺度と(2)の尺度のいずれについても、高校生時と現在(大学生時)の自分自身にあてはまるかどうか回答するように求めた。(1)(2)のほかに、いくつかの質問項目を設定したが、本論文の目的とは直接関係しないため、記述を省略する。

結果

尺度構成

主張性の4要件尺度について、大学生時に関して回答したデータを用いて4因子指定の因子分析(主成分分解・バリマックス回転)を実施した(Table 1)。項目の内容から、第1因子を「他者配慮」、第2因子を「情動制御」、第3因子を「素直な表現」、第4因子を「主体性」と解釈した。第4因子までの累積寄与率は57.20%であった。

Table 2 各尺度得点の平均値と標準偏差

	素直な表現	情動制御	他者配慮	主体性	友人関係満足感
高校生時	3.62 (0.65)	3.06 (0.83)	3.20 (0.87)	3.99 (0.81)	3.45 (0.83)
大学生時	3.88 (0.71)	2.91 (0.79)	3.10 (0.82)	3.95 (0.81)	3.61 (0.75)

注)括弧内は標準偏差

Table 3 高校生時の各要件の4群の平均値と標準偏差

	素直な表現	情動制御	他者配慮	主体性
1群	2.63 (0.32)	1.85 (0.30)	1.92 (0.41)	2.59 (0.51)
2群	3.35 (0.13)	2.50 (0.14)	2.77 (0.20)	3.51 (0.17)
3群	3.74 (0.08)	3.04 (0.18)	3.35 (0.12)	4.10 (0.15)
4群	4.29 (0.29)	3.92 (0.42)	4.04 (0.35)	4.91 (0.15)

注)括弧内は標準偏差

各因子に高い負荷量を示した項目の平均値を算出し、尺度得点とした。第2因子の「情動制御」に高い負荷量を示した項目は、主張行動の実行にもなる不安や緊張を制御できていないことを示す内容となっていた。本研究では渡部(2006, 2009)の4要件理論に合わせて「情動制御」を表す下位尺度として扱うために、第2因子に正の負荷量を示した項目の得点を逆転した上で、平均値を算出した。

高校生時についても、大学生時について回答した主張性尺度の因子分析結果を適用し、同様に得点化を行った。

友人関係満足感については、高校生時、大学生時それぞれにおいて6項目の平均値を算出した。

各尺度得点の平均値と標準偏差を Table 2 に記載する。

高校生時と大学生時における主張性の4要件が友人関係満足感に及ぼす影響

高校生時と大学生時の主張性の各要件について、得点のパーセントイル順位に基づき対象者を4群に分けた。いずれの要件についても0%から25%順位を1群、26%から50%順位を2群、51%から75%順位を3群、76%から100%順位を4群とした。例えば、「素直な表現」1群は「素直な表現」得点が最も低い群、「素直な表現」4群は「素直な表現」得点が最も高い群となっている。高校生時と大学生時それぞれについて、4要件の各群における得点の平均値と標準偏差を Table 3、Table 4 に記

Table 4 大学生時の各要件の4群の平均値と標準偏差

	素直な表現	情動制御	他者配慮	主体性
1群	2.93 (0.45)	1.97 (0.38)	1.94 (0.50)	2.88 (0.47)
2群	3.70 (0.13)	2.69 (0.13)	2.88 (0.13)	3.66 (0.03)
3群	4.13 (0.13)	3.23 (0.19)	3.38 (0.19)	4.10 (0.16)
4群	4.75 (0.19)	4.15 (0.42)	4.23 (0.41)	4.94 (0.13)

注)括弧内は標準偏差

載する。

友人関係満足感を基準変数、主張性の4要件の4群を説明変数とする数量化 類を、高校生時と大学生時についてそれぞれ実施した(Table 5)。高校生時においては「情動制御」4群と「主体性」4群で友人関係満足感が高く、大学生時においては「素直な表現」1群と「情動制御」1群で友人関係満足感が低く、「素直な表現」4群と「情動制御」4群で友人関係満足感が高かった。

高校生時と大学生時における主張性の4要件と友人関係満足感の関連

高校生時と大学生時で主張性の4要件が変化しているかを明らかにするため t 検定を行った結果、大学生時の「素直な表現」($t(256) = -6.97, p < .01$)、「情動制御」($t(256) = -3.95, p < .01$)、「他者配慮」($t(256) = -2.55, p < .05$)が高校生時よりも高いことが明らかになった。

高校生時の主張性の4要件と友人関係満足感が大学生時の主張性の4要件と友人関係満足感に与える影響について検討するために、重回帰分析の繰り返しによるパス解析を実施した(Figure 1)。高校生時の4要件を第1水準、高校生時の友人関係満足感を第2水準、大学生時の主張性の4要件を第3水準、大学生時の友人関係満足感を第4水準とした。

パス解析の結果、高校生時の「素直な表現」は大学生時の「素直な表現」を促進し、大学生時の友人関係満足感を抑制していた。高校生時の「情動制御」は高校生時

Table 5 友人関係満足感を基準変数とした数量化 類

項目 カテゴリ	高校生時				大学生時			
	度数	平均値	数量	偏相関	度数	平均値	数量	偏相関
素直な表現								
1	49	3.39	-.08	.06	64	3.12	-.22	.17 **
2	62	3.60	.03		61	3.53	.13	
3	46	3.60	.04		67	3.46	-.03	
4	92	3.74	.00		64	3.67	.13	
情動制御								
1	50	3.42	-.20	.28 **	53	3.02	-.37	.25 **
2	56	3.51	-.09		70	3.49	.08	
3	76	3.47	-.12		66	3.40	-.02	
4	67	3.99	.36		67	3.77	.23	
他者配慮								
1	50	3.75	-.04	.08	53	3.68	.06	.06
2	66	3.57	-.06		56	3.39	.00	
3	60	3.55	.00		78	3.40	.02	
4	73	3.60	.09		69	3.36	-.07	
主体性								
1	40	3.47	-.11	.15 *	64	3.35	-.06	.08
2	56	3.51	-.05		33	3.32	-.03	
3	86	3.54	-.06		83	3.38	-.04	
4	67	3.86	.18		76	3.65	.11	
全体	249	3.61			256	3.44		
		R^2	.13 **			R^2	.14 **	

* $p < .05$, ** $p < .01$

の友人関係満足感と大学生時の「情動制御」を促進していた。高校生時の「他者配慮」は大学生時の「素直な表現」と「他者配慮」を促進していた。高校生時の「主体性」は高校生時の友人関係満足感や大学生時の「他者配慮」、「主体性」を促進していた。高校生時の友人関係満足感、大学生時の「情動制御」を抑制し、大学生時の友人関係満足感を促進していた。大学生時の「素直な表現」は大学生時の友人関係満足感を促進していた。大学生時の「情動制御」は、大学生時の友人関係満足感を促進していた。

考察

主張性の4要件と友人関係満足感との数量化 類の結果から、高校生時においては、情動をコントロールできていたことや自分の行動を主体的に決定できていたことが友人関係満足感を高めることが示された。大学生時においては、率直に自分の考えを表現できないことや情動をコントロールできないことが友人関係満足感を低く

していた。高校生時と大学生時のいずれにおいても、他者への配慮は友人関係満足感に直接の影響を与えていなかった。

高校生時には「素直な表現」が友人関係満足感に関連し、大学生時には「主体性」が友人関係満足感に関連していた。この関連する要件の違いは、2つの時点での友人関係のあり方の違いを反映したものであると考えられる。高校生時においては、まだ十分に相互尊重的な友人関係が形成されておらず、友人に対して自分の感情や考えを伝える行為がすべての人において常になされているとは限らない(榎本, 1999, 2000)。そのため、実際に友人に対して自分の意見を伝えたかということよりも、行動を自身の判断で決定していたのが、友人関係満足感に影響すると推測される。一方、大学生時においては、すでに相互尊重的な関係が確立し、お互いの価値観や考え方を尊重するつきあい方が確立しているため、実際に友人に考えを伝えているかどうか満足感につながるかと推測される。

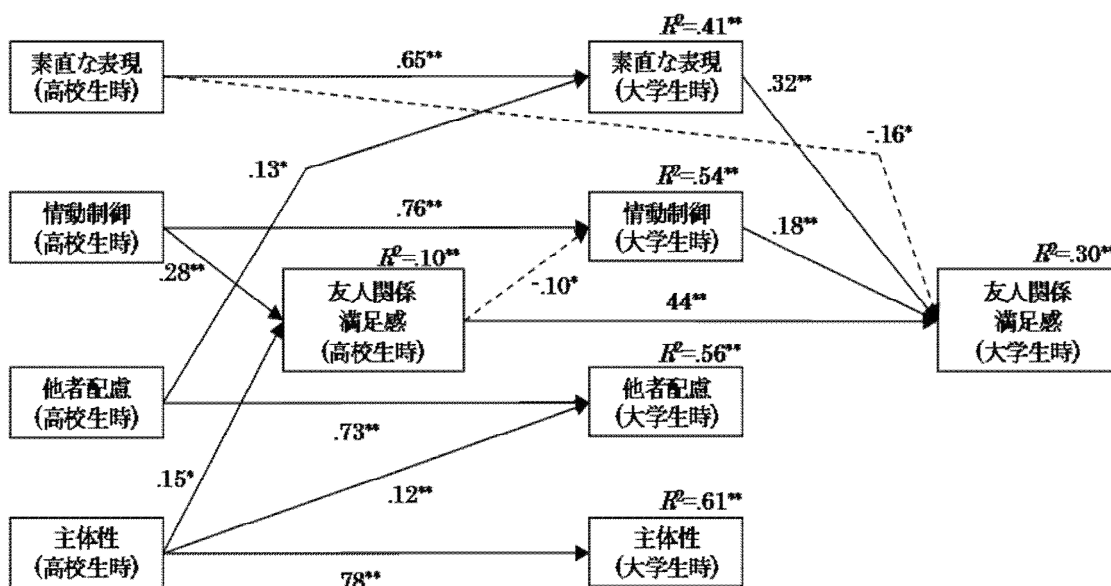


Figure 1 高校生時と大学生時の主張性の4要件
および友人関係満足感のパス解析

** $p < .01$, * $p < .05$, 実線は正のパス、波線は負のパス

高校生時と大学生時の結果に共通していた点として、「情動制御」が満足感を促進していたこと、「他者配慮」が満足感と関連しなかったことが挙げられる。「情動制御」は、主張する際の緊張感や不安感を制御できるかを示す内容であったため、高校生であっても、大学生であっても、友人に対して不安感をもたずに主張できることが満足感を高めると考えられる。また、「他者配慮」については、本研究では日常の友人との関わりについて尋ねており、親しくつきあっている友人の間ではお互いに気を遣い合うということがなく、満足感に直接影響しなかったのではないかと考えられる。

本研究では、主張性と適応との間に Ames & Flynn(2007)や渡部(2009)のような明確な曲線関係は認められなかった。しかし、Table5の各基準変数の平均値や数量の値を見ると、有意な結果がみられた高校生時の「情動制御」や「他者配慮」の要件ではいずれも4群で急激に友人関係満足感が上昇していた。また、大学生時の「素直な表現」や「情動制御」では、1群で友人関係満足感が低く、4群で上昇していた。このことは、各要件が上昇するのに伴って漸進的に満足感が高くなるのではなく、各要件の得点が極端に低い1群や極端に高い4群においてほかの群と質的に異なる特徴がみられることを示している。今後は各要件の極端に低い状況や高い状況について、さらに検討を重ねていくことが求められる。

さらに、高校生時の主張性が大学生時の主張性に及

ぼす影響を検討したところ、高校生時の「他者配慮」が大学生時の「素直な表現」を促進し、高校生時の「主体性」が大学生時の「他者配慮」を促進していた。この結果は、高校生時に不十分であった点を、大学生時において補完するような自己表現が行われていることを示すと考えられる。例えば、高校生時に人に気を遣ってばかりだったと認識している大学生は、自己の考えや感情の表現をより多く行うようになり、高校生時に自分の意志を優先して行動していたと認識している大学生は、相手への配慮をより多く行うようになると推測される。

本研究の問題点として、測定に際して回顧法を用いたことによる制限が考えられる。本研究では、大学生を対象に高校生時の主張性について回顧法で測定している。そのため、回答者が実際に高校生時に獲得していた主張性の程度が完全に反映した結果とは言いがたい。本研究の結果は、回答者の大学生が過去の自身の対人関係のあり方を想起し、現在との比較の上で回答したものである。したがって、本研究で得られた知見は、大学生自身の友人関係とのつきあい方の成長の認知を記述した知見であると考えらる。

また、本研究は、自己評価による主張性と友人関係における適応との関係を検討している。しかし、主張性を4要件から見た場合でも、他者からの評価に曲線的な効果が見出される可能性がある。今後は、他者の視点から、主張性の4要件と対人関係における適応との関係を検討することが求められる。

引用文献

- 阿部真由美 (2007). 大学生の友人関係におけるアサーション「自己主張」と「他者受容」のバランス 聖心女子大学大学院論集, **29**, 1, 196-177.
- Ames, D. (2009). Pushing up to a point: Assertiveness and effectiveness in leadership and interpersonal dynamics. *Research in Organizational Behavior*, **29**, 111-133.
- Ames, D., & Flynn, F. J. (2007). What breaks a leader: The curvilinear relation between assertiveness and leadership. *Journal of Personality and Social Psychology*, **92**, 307-324.
- 榎本淳子 (1999). 青年期における友人との活動に対する感情の発達の变化 教育心理学研究, **47**, 180-190.
- 榎本淳子 (2000). 青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連 教育心理学研究, **48**, 444-453.
- 稲田亜希子 (2006). 大学生の友人関係とアサーションとの関連 ふれ合い恐怖と友人への欲求の視点から 武庫川女子大学発達臨床心理学研究所紀要, **8**, 53-62.
- 加藤 司 (2001). 対人ストレス過程の検証 教育心理学研究, **49**, 295-304.
- Kern, J. M. (1982). Predicting the impact of assertive, empathic-assertive, and non-assertive behavior: The assertiveness of the asserter. *Behavior Therapy*, **13**, 486-498.
- 工藤頌子・金子劭榮・池上貴美子・佐々木和義 (2007). 大学生におけるアサーションと友達とのつきあい方の関連 発達心理臨床研究, **13**, 19-28.
- Lorr, M., & More, W. (1980). Four dimensions of assertiveness. *Multivariate Behavioral Research*, **15**, 127-138.
- Lowe, M. R., & Storm, M. A. (1986). Being assertive or being liked: A genuine dilemma? *Behavior Modification*, **10**, 371-390.
- 柴橋祐子 (1998). 思春期の友人関係におけるアサーション能力育成の意義と主張性尺度研究の課題について カウンセリング研究, **31**, 19-26.
- 柴橋祐子 (2001). 青年期の友人関係における自己表明と

- 他者の表明を望む気持ち 発達心理学研究, **12**, 123-134.
- 玉瀬耕治・越智敏洋・才能千景・石川昌代 (2001). 青年用アサーション尺度の作成と信頼性および妥当性の検討 奈良教育大学紀要, **50**, 221-231.
- 渡部麻美 (2006). 主張性尺度研究における測定概念の問題 4 要件の視点から 教育心理学研究, **54**, 420-433.
- 渡部麻美 (2009). 高校生における主張性の 4 要件と精神的適応との関連 心理学研究, **80**, 48-53.
- 渡部麻美・松井 豊 (2006). 主張性の 4 要件理論に基づく尺度の作成 筑波大学心理学研究, **32**, 39-47.
- 山岸明子 (1998). 小・中学生における対人交渉方略の発達及び適応感との関連 性差を中心に 教育心理学研究, **46**, 163-172.

註

- 1) 本研究は、第一著者の博士論文(2008年度筑波大学大学院人間総合科学研究科心理学専攻の一部を加筆修正したものである。なお、本論文の一部のデータは日本社会心理学会第50回大会・日本グループ・ダイナミックス学会第56回大会合同大会(2009)において発表された。
- 2) 本研究のデータ収集に際してご協力いただいた原奈津子先生(就実大学)に感謝申し上げます。
- 3) 渡部(2006)は、主張性関連文献を整理し、主張性の理論的概念に、「素直な表現」、「情動制御」、「他者配慮」、「主体性」の4つの構成要素が含まれていることを明らかにした。従来の主張性の実証研究では、4つのうち「素直な表現」のみに焦点が当てられることが多く、このことが主張性と攻撃性の測定概念における混同や、主張的な行動に対する否定的評価を引き起こす要因となっていた。上記の4つの構成要素は、対人場面での反応が本来の意味で主張的であるために必要な条件であると考えられる。以上から本研究においても、先行研究(渡部, 2006, 2009)と同様に4つの構成要素を「4要件」と呼ぶ。

The relationship between four requirements of assertiveness and friendship satisfaction based on the high school and college experiences of college students

Asami WATANABE(*Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science PD,
Tokyo Gakugei University*)

Yutaka MATSUI(*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba*)

This study examined the difference between how four components of assertiveness (Watanabe, 2006) relate to friendship satisfaction of college students during their high school days and during college days. The analysis in this study assumes that there exists a curvilinear relation between assertiveness and satisfaction. It also examines the relationship between assertiveness of college students during their high school and that during college days. Two hundred and fifty-seven college students answered a questionnaire on the levels of assertiveness and friendship satisfaction experienced by them in their high school and college days. The results of Hayashi's quantification method type I showed that in high school "control of emotion" and "self-direction" increased friendship satisfaction, whereas in college, "open expression" and "control of emotion" had the same effect. It was shown that satisfaction increased rapidly in cases where particular component of assertiveness were extremely high, and it did not increase gradually along with increasing assertiveness. Path analysis results suggest that self-expression supplementing points, which were thought to be insufficient in high school, should be experienced in college.

Keywords: assertiveness, friendship satisfaction, adolescence, college students, curvilinear relation.